

2014年5月15日(木)

医療福祉ジャーナリズム特論 大熊由紀子教授

「信じて待つことの大切さ」

4A11039 浅野泰世

ここ数年、高齢の両親の介護は私自身にとって最も重要な課題になっていました。小さな事件を繰り返し確実に衰えてゆく両親を見つめながら、ときには悲しく、ときには苛立ち、そして、今後起こりうる困難を予想して不安でいっぱいでした。先生のお話をうかがっていると、力が抜け、気持ちが楽になりました。何よりも、両親にやさしく向き合える、そんな勇気をいただきました。

実家を訪ねた時のことでした。母に言われトイレを覗いてみると、便座に手すりを取り付けてあるではありませんか。これを見て思わず苦笑してしまいました。今から2年余り前、介護保険を利用して手すりをつけてはと母に提案し、感情的に拒否され落ち込んだことを思い出したからです。

両親が初めて介護認定を受けたのは今から3年以上も前のことです。父の気力が急に衰え、具合が悪いと床に就いていることが増えました。長年両親は分担して家事をやっていました。母一人にかかってくる負担を考え、幾度となく介護サービスの利用を提案してきました。今の暮らしを少しでも長く続けてゆくために、無理をせず、利用できる援助は受け入れてほしいと思ったのです。しかし、その提案はことごとく拒否され、母に精神的な負担を強いたという思いだけが残りました。

2012年の年の暮も押し迫った頃、両親が数か月お風呂に入っていないと知りました。「何か良い方法を考えよう」と母と話し合しあうつもりが、非難していると受け取られ、初めて母を泣かせることになってしまいました。父だけでもと思いましたが、すでに私が一人で入浴させるのは危ないと諦めざるを得ませんでした。この時初めて、介護サービス利用に向け動くことを決めました。

ケアマネさんの実家訪問予定は事後承諾で両親に伝えることになってしまいました。これまでの経験から、容易に受け入れられないと覚悟していましたが、以外にも母はすんなりと手帳に予定を書きいれてくれました。ケアマネさんと、両親、敷地内同居の弟夫婦、私の面談の結果、父の入浴サービスと入浴補助の介護用品の購入が決まりました。その後利用するサービスに、実家の掃除が加わりました。そして、今度はトイレの手すりです。そのとき思いました、結局私の言ったことが正しかったのだと。

・・・本日の講義をうかがうまでは。

先生のお話には、「人にたのみたくない」「家族や子供たちに迷惑をかけたくない」「今までどおりに・・・」「出来る限り自分で・・・」という、高齢者の想いを叶えるため、彼らとどのように向き合い、どのように話したらよいのか、その疑問に答える多くのヒントが含まれていました。それは、私自身の両親との向き合い方に、多くの反省点があったことを教えるものでした。

- ・家族の頑張りを理解することが、家族と本人の優しい気持ちにつながる。
- ・良くしようという思いが、身近にいる家族に負担を与えてしまう。
- ・介護用具やサービスは導入のタイミングが難しい、必要性に気づくのは本人。
- ・家族よりも、他人のケアマネさんの言葉が受け入れやすいこともある。

確実に老いを重ねる両親には、今後新たな手助けが必要になってくるのだと思います。私はこの先も小さな事件があるごとに迷い、間違いを犯しそうになるかもしれません。そのとき、今日の先生のお話を思い出し、年老いた両親の気持ちを理解する助けにしたいと思いました。何よりも両親を信じる勇気を与えて下さった素晴らしい講義に、心からお礼を申し上げます。